令和４年度　第２回　学校運営協議会　議事録

１　日　時　令和４年 10 月 25 日（火）10 時から 12 時
２　会　場　静岡県立袋井特別支援学校　会議室
３　参加者　計 15 人
（１）　学校運営協議会委員　　５人
委員Ａ、委員Ｂ、委員Ｃ、委員Ｄ、委員Ｅ
（２）　学校関係者　10 人
校長、副校長、教頭、事務長、小学部主事、中学部主事、高等部主事、教務課長、支援連携課長、ｺﾐｭﾆﾃｨ・ｽｸｰﾙﾃﾞｨﾚｸﾀｰ（ＣＳ）

４　内　容
（１）　開会挨拶（校長）
８月 31 日に２学期がスタートし、少しずつ色々な活動に取り組んでいる。２学期始めに大雨やスクールバスの遅延等があり、危機管理について改めて考える機会となった。台風 15 号の影響で、清水特別支援学校が断水し、１週間の休校措置を行った。本校でも、学校が安全で安心である場所であるために、どのような準備ができるか、人・物・金には限りがある中で想像力を持って取り組みたい。
子どもたちの学習はコロナ禍前の状態に近付くよう、取組みを進めている。10 月 20 日、27 日には３年ぶりとなる授業研究会を行う。他校の教員を迎えて授業を見てもらい、互いに学び合うことで授業力を高め、今年度後半の授業実践に生かしていきたい。
子どもたちが校外に出ていく機会も増えている。どう地域の方々に支えてもらいながら授業実践を行うのか、私たちが地域のためにできることとは何か、多くの意見交換を行っていきたい。

（２）　会長挨拶（委員Ａ）
９月 23 日の大雨では、袋井では約 300 件（高南地区 144 件）の床上、床下浸水被害が出た。線状降水帯が確認されたときにはあっという間に浸水した。床上浸水被害等の復旧は、防災スタッフのアイデアでラインを使い、知りうる高南地区内外のグループの人達に連絡を入れ、25 日には、あらかた片付けることができた。ラインでの発信は有効である。助けてほしいことをきちんと伝え、それを受けてくれるチャンネルがあることが大切。日頃のチャンネルやネットワークの重要性を感じた。
10 月７・８・９と高南地区で祭りを実施した。３年ぶりの実施である。９時から夜７時まで子どもたち、高齢者含め、多くの方がまつりを楽しんだ。「やめる」ではなく、手を打ちながらそれでも続けて行こう、という思いがある。規制をしながらではあるが、成果があった。来年も体制を組みながら、セーブしながら、できるところから少しずつやっていくことが大切だと考えている。

５　報告

（１）　学校経営の進捗状況説明（教務課長より）

学校自己評価（中間）全体評価について説明。４段階評価で結果のパーセンテージの該当なしは含まず、回答があったもののみ数字として取り上げている。

【安全・安心】

・危機管理

実際的な防災訓練の実施、アクションカードの活用、情報の共有等、引き続き取り組んでいく。自分事として捉え危機管理意識高めることが重要である。安全な学習環境の視点から、自らの指導、学習環境の見直し等の意識の高まりが見られた半面、ヒヤリハットでは同じような事案が繰り返されたケースもあった。

【子ども主体の授業】

・人権感覚

挨拶や感謝の言葉を伝えあうこと、若手とベテランの教え合い等が充実してきた。今後も職員同士の相談体制の充実やＯＪＴへの取組みを重点的に行っていく。

・専門性の向上

実態の捉え方や目標設定の仕方等、自立活動学習会や研修会の実施等を行って取り組んできた。後期は、教員間の学び合いや実践の振り返り、共有を深め、より専門性が高められるように取り組んでいく。

12 年間の積み上げという点では、道徳、体育、防災、進路、日常生活の指導について、小中高全体計画を作成し、それらを活用した授業づくりに取り組んでいる。全体計画の周知、活用についての徹底が課題である。今後は、単元カード、指導カードに該当項目を記載し、教員が意識的に取組めるようにしていく。

【連携】

・交流教育

校外へ向けた発信では、居住地での交流、学校間交流等を実施した。引率した教員にとっても子どもが地域で生きていく必要性を考えるよい機会となった。半面、まだイメージができていない教員も多い。交流の意義の周知を図り、イメージの共有や取組みの紹介をしていく。

学校コンサルタントの取組み（定期訪問）では、学校全体に関わる深い相談内容になりにくい。今後要請訪問を勧め、より充実した訪問となるように取組みを進める。

情報発信については、情報を受け取る相手（保護者）のニーズに合った情報が発信できているかを探りながら取組みを進めている。

学部や分掌の連携（校内）については、教育活動を実施する上でポイントとなる学年主任や分掌課長が学校運営に十分参画できるよう、丁寧な説明を行いながら取り組んでいる。

（２）　教育活動等への提言（委員より）

委員Ｅ　　：全体的に評価のパーセンテージが高く、嬉しい。道徳は普通の学校でも難しい。どう学習していくのか。

校長　　：高等部は日課表の中に位置付けられている。時間の指導を行っている。他学部は生活単元学習や日常生活の指導等、様々な学習の中で行っている。学習内容としては、身近な内容を取り上げながら、他者理解や協力などを学習している。実際の生活の中でつながっていくように取り組んでいる。

高等部主事：高等部では、日々の生活の振り返りの中で、感謝の気持ちに視点をあてて行うなど、工夫している。校内の清掃を取り上げる場面もあり、みんなが使っているところをきれいにする活動を道徳の授業の中で行っている。今年度初めての取組みなので、試行錯誤しながら取り組んでいる。

校長　　：約束やルールを守る等は小中学部の生徒にも分かりやすい道徳の内容である。

委員Ｄ　　：先生方はがんばっているという印象を持った。新型コロナウイルス感染症の状況はどうだったか。

校長　　：濃厚接触者にならないための取組みを実施している。マスクができない子どもたちもいる中で、感染者を増やさないために教員が何をすべきか、考えながら実践している。

委員Ｄ　　：先生も御家族も気を使っているだろう。幼稚園バスの取り残し事故があった。この学校の児童生徒もバスで登校している。出席の確実性についてはどう取り組んでいるのか。

校長　　：スクールバスは、常時５台、コロナ対策で増便が４台あり、合計９台運行している。児童生徒の取り残しには気を付けている。出欠の確認は、バス停までは保護者が責任もってきてくれている。学校で降りる際は、教師が迎えに行って降りる。一人で降りる子については、昇降口、もしくは教室で必ず出欠の確認を行っている。不在のときには、家庭に連絡を入れている。

委員Ｄ　　：取り残しについては、今後も十分注意してほしい。

委員Ｃ　　：行方不明者捜索訓練では、学校から出て行ったなど地域との関係はあるのか。出て行ったときに地域の人たちに助けてもらうという取組みはあるのか。

作品展示について、希望館の来館者にできる限り紹介している。地域の人も「光る子まつりを知っている。今年はどうなのかしら」など知っている人もいる。

地域の人たちは、障害のある子に対して温かい気持ちをもっているが、目の前に障害のある子がいる場合、どう声を掛けていいか、どういうまなざしを向けたらいいか、分からず、そのままそっとしとこう、となってしまう。地域側として、どういうスタンスをとったらいいのか分からない。地域の人に対しても、道徳、公共、ルール、マナーなど、社会教育として知っていってもらいたい、という役割もある。ここの生徒たちがお手本になってくれれば。コミュニケーションの取り方がお互いに分かれば、コミュニティスクールの源流になるのではないか。

校長　　：行方不明捜索訓練では、外にも行く。マニュアルを基に捜索し、地区を区切って捜索に出るという訓練を実施している。そのときに地域の人にお願いしようという発想はなかったが、協力してもらえるとありがたい。知らない人ではなかなか難しい場面もあるかもしれないが、協力していただけるというのならば、助かる。警察や無線の使用は保護者の依頼で動いていく。

コミュニケーションの取り方を話題にしていただき、ありがたい。何かの形で出したい。

支援連携課長：コミュニケーションの取り方については、支援連携課だよりでも載せていきたい。校外の作品交流などで関わる場合は、担当間で事前打ち合わせを行っているので、その中で伝えられることもあると思う。

委員Ｂ　：危機管理のことでは、ヒヤリハットで同じような事象が起きているという報告があった。ヒヤリハットは実際には何件あったのか。同じような事例の中にも色々な学びがある。転ぶ、ということの中にも、どうして転ぶのか？なぜ？と掘り下げて考えることで生かされるのではないか。

災害では大雨の話題があった。そういう時期は、危機管理意識も高まる。リアルな話をしながら、ヒヤリハットを集めて安全性を高めていければよい。

校長　：ヒヤリハットでは、子どもの怪我以外にも、おたより類の配付忘れや服薬のタイミング間違い、連絡ノートの入れ違い等がある。

委員Ｂ　：マンネリ化を防ぐため、ヒヤリハットはたくさん出し合うとよい。

委員Ａ　：学校評価を見て思ったのは、大体ＡかＢの評価が出ている。先生方の頑張りがわかる。コミュニケーションでは、本人や保護者がどう思っているか、意見を組み取ることができるとよい。

ＴＶの情報だが、日本の子どもは自己肯定感が低いとあった。楽しいとか、嬉しいとか、肯定的に捉えている子が少ない。色々な授業や運動会等で、先生方が褒めて、引き立てている様子を見た。親も先生方も、褒めて育てていることを感じた。本人や保護者の思いも聞いて実践に生かすことが大切。他者の目も入れることで、より生かされるのではないか。

ヒヤリハットでは、結果的には重大事件にならずによかった。ヒヤリハットは、もっといっぱいだせと言われる。その中に潜んでいるものがある。一番大事な安心安全、そうしたスタンスで、何がどこに潜んでいるかを踏まえて、子どもたちを見守っていく体制づくりを行ってほしい。

教務課長　：保護者からの御意見をいただく評価は、年度末評価にてアンケートを実施する。時期は 11 月末～12 月で、次年度に生かす目的がある。子どもたちの思いの聞き取りは、高等部については実施している。小中学部は教員が日々の様子を見ながら思いを組み取るようにしている。

６　協議

（１）　学校を知ってもらう活動について（司会委員Ａ）

委員Ａ　：学校を知ってもらう活動では、以前、製品販売会に参加したことがある。たくさんの製品が販売され、大勢の人参加していた。こんな形で交流ができるとよい、こういう活動が良かった、こうしたらいいのでは、ということを出し合いたい。

委員Ｃ　：美術・作業作品展示計画を立て、きぼう館、あえるもん、アイプラザで７月から行わせてもらっている。小５児童の保護者があえるもんに作品を見に来てくれた。10 月は高等部の作業製品や美術作品展示中。サービス班の生徒たちが自分たちでレイアウトして行った。次の販売につながっていくと、取組みが膨らんでいく。

地区回覧に載せているコミュニティスクールだよりでは、光る子まつり、美術作品の紹介をさせてもらった。

支援連携課長：普段着交流については、地域の学校の教職員対象でスタートした。地域の方にも学校に来ていただき、実際に見ていただく機会としてもらえればと思う。事前にお電話をいただければ、いつでも見てもらえるようにしていくつもりである。

校長　　：土曜日の小学校参観会のようなイメージで実施する。学校説明の書面も交流参加者に渡し、説明しながら授業をみてもらっている。高等部の卒業後の進路先や、こういう子どもたちがいる、という理解につながればと考えている。健康チェックをしたうえでいつでも来てほしい。

光る子まつりにも、ぜひ来校してほしい。

支援連携課長：今後、回覧板にて伝える。

副校長　　：今回は地域の方はバザーへの御招待となる。30 名くらい来ていただけると嬉しい。子どもたちの製品販売はない。

委員Ａ　　：数年前肢体不自由教育生徒さんの抽象画が気に入ったが、非売品だった。

そういう才能のある子もいる。

高等部主事　：高等部自主生産作業は七つの班がある。光る子まつりでは保護者向けに販売する。それ以降は、地域の方々にも買っていただく機会を作りたい。コロナの関係でなかなか外にも出ていけないが、感染症対策を行うことで、地域に出向いて販売を行っていきたい。各班、販売先や販売方法を検討中。サービス班は、きぼう館や地域のお店等での清掃を希望している。

製品販売先など、情報があれば教えていただきたい。たくさんの量はいっぺんには作れないが、お客様の注文を受けて製作、販売を行いたい。

委員Ｂ　　：先程の絵の話では、絵のコピーやミニチュア等を販売してはどうか。フレームに入れてあるだけでも味がある。いろんな人に、身近に置いてもらえるのではないか。

校長　　：見てもらう、知ってもらう場が増えてくれば嬉しい。

委員Ａ　　：南公民館の館長さんは理解があるので、相談してみるとよい。市役所など、展示のエリアを広げてはどうか。袋井南コミュニティセンターにはギャラリーがある。清掃もよい。

駅ビル１階（商工会議所）、くれたけインプレミアム１階のスペースも活用できないか。

キラットも活用できるのではないか。

ＣＳ　　：キラットには作品を飾れるスペースがある。駅ビルは時期によって展示が変わる。商工会議所の方とも打ち合わせ中である。

委員Ｄ　　：東海アクシスでは袋井特支へ焼き物を注文して作ってもらったことがある。アクシスの生徒も、袋井特支で実習すると視点が変わるようだ。作品を知ってもらう取組みでは、個人的に、カレンダーなんかいいと思う。好きな方がいれば、使ってもらえる。親御さんにも承諾を得ればいいのではないか。

委員Ａ　　：地域のまつりは、金曜の午後から土日にかけて行うことが多いので袋井特支の子どもたちの参加は難しいかもしれない。ただ、校庭に屋台を引き込んでやることもできる。

広報は大事。いろんな手段を使って広報を行うとよい。

委員Ｃ　：口コミの方が確立は上がるが、チラシも大切。ラインで関心ありそうなグループに送ると効果があるかもしれない。

校長　：子どもたちがお年寄りの施設に出向いていって和太鼓を演奏したり劇をやったり、他校でも行ってきた。そのような機会を作ると児童生徒の自己肯定感の向上にもつながる。

小学部主事　：日々の授業の中での積み上げを学校外の方に知ってもらったり、喜んでもらえたりすることで、励みにもなる。音楽のちょっとした発表をあえるもんさんで５分くらいやらせてもらい、居合わせた方に聞いてもらう等もできれば。

委員Ａ　：水曜日に実施できるとよい。

校長　：高等部の音楽なんかでもできるのではないか。

小学部主事　：小学部高学年は、光る子まつりのゲームコーナーを持っていくのもいいか。ゲームの説明をしてちょっと楽しんでもらえるとよい。いつもやっていることをベースに、知ってもらう、楽しんでもらう。コロナが落ち着いてくれば、地域の中で得意なことがある方に授業に参加していただくなど、できれば嬉しい。

委員Ｃ　：スポ協さんはボッチャを広め、町内対抗をしたいが、なかなか広まらない。大会に参加していただくなどできるか。

高等部主事　：高等部ボッチャ部がある。先日大会にも出ている。参加できれば嬉しい。

委員Ｃ　：スポ協さんのボッチャは、きぼう館にて、毎月１回、誰が来ても良い。日曜日の午前中に実施。時間が合わないから、授業交流は難しいかもしれないが、大会への参加はどうか。11 月５日（日）にある。

委員Ａ　：年間計画が決まっているから、支援学校にも声を掛けていけるとよい。

委員Ｅ　：光る子まつりバザーは、保護者の不用品を販売するバザーである。生徒の製品は販売しないということを地域の方からの問い合わせがあったときに伝えてほしい。

校長　：体育館には、子どもの作品も展示されている。今後、高等部生徒による販売も予定している。袋特市の実施はない。

中学部主事　：中学部では、２月に製品販売会を行う。また、コメリさんの事業を利用して、袋井市花の会との交流を行っている。袋井市駅前等の緑化に今後関わっていきたい。

副校長　：たくさんのアイデア、御意見に感謝している。ディレクターを通じて調整をしていきたい。

委員Ａ　：学校の窯を借りて地域の方が焼き物を焼いたことがあったと聞いている。それが一つの交流になっていた。許されれば再開できるとよい。学校をオープンにしていくという意味でも、できるとよい。企業等も支援してもいいというところもあると思う。コメリさんの例がある。学校のアピールにもなる。声がかかれば来たい、という人もいる。やってみる価値はある。

７　校長挨拶

色々なアイデアや、教員だけではなかなかでないような意見をたくさんいただけた。できそうなところを精査して、コーディネーターが調整し、フットワーク軽くやっていけるようにしたい。ぜひこれからもお願いしたい。